



- 永代共養墓について
- ぶつぶつ雑記ブログ
- 真言宗について
- 金剛院イベント情報
- 金剛院 建築計画
- しいなまち・みとら
- 唱えてみよう!
- 仏教一年生
- 金剛院News
- メールを送る
- こんごういんキッズ!
- たいけんしてみよう!
- まんが小坊主くん!
- 金剛院について
- おすすめリンク集
- メディアで紹介
- 東京お寺めぐり
- ぶつムクイズ
- 金剛院の四季
- バックナンバー
- ほほほのれしび
- ぶしぎな密教法具
- 地図・アクセス
- サイトマップ

 検索

エッセイ 仏教一年生

- 第37回 [「智の器」としてのお寺の面白さ](#)
- 第36回 [日食メガネと雨男](#)
- 第35回 [東日本大震災一周年に想うこと](#)
- 第34回 [インドマジックで被災地に笑顔を「2」](#)
- 第33回 [インドマジックで被災地に笑顔を「1」](#)
- 第31回 [井戸の話](#)
- 第30回 [五筆和尚伝説](#)
- 第29回 [縁の下をささえる人々](#)
- 第28回 [日本人、最高!](#)
- 第27回 [人間と占い](#)
- 第26回 [空海さんの謎](#)
- 第25回 [私の知らない私](#)
- 第24回 [記憶と感情](#)
- 第23回 [美人病にかかる\(後編\)](#)
- 第22回 [美人病にかかる\(前編\)](#)
- 第21回 [四億年の引きこもり](#)
- 第20回 [年齢を隠したがる人たち](#)
- 第19回 [若い時の苦労は買ってでもしろ](#)
- 第18回 [子離れの季節](#)
- 第17回 [35年目の同窓会](#)
- 第16回 [不老不死のお酒](#)
- 第15回 [アンチエイジング](#)
- 第14回 [女子力不足](#)
- 第13回 [仏のレッスン](#)
- 第12回 [母と子をつなぐ道](#)
- 第11回 [座敷わらし](#)
- 第10回 [夢のお告げ](#)
- 第9回 [犬に引かれて](#)
- 第8回 [生まれ変わり](#)
- 第7回 [お葬式の意味](#)
- 第6回 [不思議なご縁](#)
- 第5回 [生きるための勇気](#)
- 第4回 [祖母の形見](#)

仏教一年生

山田真美・著



作家、日印芸術研究所言語センター長の山田真美さんの連載です。

[プロフィール紹介](#)

第13回 仏のレッスン

BI 0 チェック いいね! 0 Tweet

早いもので、「仏教一年生」も2年目に突入します。当初は「12回完結」を予定していたこのエッセイですが、金剛院の御住職から、「とても評判が良いので、2年目もお願いできますか」と、ありがたいお声をかけていただき、このまま続投させていただくことになりました。その際に御住職からは、「今年はタイトルを『仏教二年生』としましょうか」という親切なご提案までいただいたのですが、「できれば今年も一年生のまま“留年”させてください」と、たっつお願いをいたしました。というのも、なにしろ私は仏教の何たるかもわかっていない真正銘の鼻垂れ小僧です。この1年間で「二年生」に進級できるほど成長したとは、正直、とても思えません。ですから、今年もやっぱり「一年生」で行こうと思いますので、引きつづき、どうぞよろしくお願いたします。

というわけで、今日のテーマは「仏のレッスン」です。

実は最近、私のスケジュール帳には、1週間に1度の割合で「仏のレッスン」という文字が書き込まれています。これを見た方は、「仏のレッスンというからには、山田さんは、お経の勉強でもしているのかな?」と思われるかも知れません。ところが実際はそうではなく、私が受けているレッスンは、仏は仏でも仏教ではなく、「フランス語」のレッスンなのです。

実のところ、私は親しい友人たちから冗談半分に「言語オタク」と呼ばれるほど、外国語の勉強が大好きな人間です。これまでに少しでも齧ったことのある外国語を数えあげると、英語、インド諸語(サンスクリット、ヒンディー、マラヤラムなど)、ヘブライ語、ピジン語、スペイン語、エスペラント語、ドイツ語、ギリシア語、ロシア語、チベット語、中国語など。

と言っても、そのうちの多くは趣味でちょっと齧っただけ。齧ってはみたものの使うチャンスが

- [第3回 ありがとうの輪](#)
- [第2回 お釈迦さまのお顔](#)
- [第1回 算数と仏教](#)
- [仏教一年生 山田真美・著](#)



なく、そのまま脳みそのなかで“海のもくず”と化してしまった言葉もたくさんあるのが……。

なかには仕事で使えるほど上達した言葉もありますが、それはむしろ例外と言ったほうがいいでしょう。日本のような単一言語国家で暮らしていると、(英語のようなメジャーな言葉は別として)日常的に外国語を使うチャンスはほとんどありません。使わなければ、言葉はすぐに錆(さ)びつき、そのまま“海のもくず”となってしまうわけです。

さて、友人から“言語オタク”と呼ばれる私ではありますが、そんな私が長年にわたって「苦手」と感じ、「このコトバだけは齧るのもイヤ」と敬遠してきた言葉が、たったひとつありました。それが、何を隠そうフランス語です。

私がフランス語を苦手になったのには、理由があります。あれはまだ20代のはじめ頃でしたか、パリ出身の知人に「フランス語を教えて」とたのんだところ、のっけから発音を大笑いされ、あげく、

「キミにフランス語は無理みたいだから、勉強しても時間のムダだと思うよ」と最後通牒を突きつけられたのです。

今の私なら、こんな失礼な先生はこちらから願い下げですが、なにしろその頃は私も若かったので、相手の言葉にカチンと来てしまい、同時に(そうか。私には才能がないのか)と落胆して、いっぺんでフランス語そのものが嫌いになってしまったわけです。

今にして思えば、ずいぶんくだらない理由でひとつの言語を嫌いになったものですが、人が何かを好きになったり嫌いになったりする動機なんて、案外、こんな小さなことがきっかけになるものではないでしょうか。最初にひと言、褒めてもらえるか貶(けな)されるかで、その後の方向性が180度ガラッと変わってしまうなんて、人生ではまああることでしょう。

40歳を過ぎた頃、私はふっと20年前の自分を思い出して、

(あんなつまらない理由でフランス語を嫌いになってしまったのは、もったいなかったな)と思うようになりました。

それは、「後悔」というほど大袈裟な感情ではありませんでしたが、長い歳月とさまざまな人生経験を経てたどり着いたひとつの境地、若いときには欠けていた「物事を大局的に見る」心の余裕が、(あれはもったいなかったな)と感じさせたのかも知れません。

人生は一度しかなく、その人生に責任を負うことができるのは、世界中どこを探しても自分しかいません。言い換えれば、今ここにある現実、みずからの過去の行動や思索の積み重ねが形になったものに他ならないのですし、悪い結果を誰かに責任転嫁するなど、まったくのナンセンスでしかないのです。

私がフランス語を敬遠するようになったそもその原因は、たったひとりの「ヘンなフランス人」だったかも知れませんが、よくよく考えてみれば、本当の原因は自分の潜在能力を信じなかった自分自身の弱さにあるのです。

そんなことを考えているうちに、私はどうしても、もう一度フランス語に挑戦したい気持ちを抑えきれなくなっていました。こんな気持ちになったのは久しぶりです。善は急げで、この春から20歳前後の若い人たちに混じってフランス語の勉強を再開したのでした。

最初はどうなることかと思いましたが、「案ずるより産むはやすし」で、結構すらすらとフランス語が頭に入ってくるのは意外でした。

20歳のときより今のほうが頭が冴えているなんて、物理的にはあり得ないことかも知れませんが、考えてみると学生時代はテストの点数やらレポートの提出期限やら、いろいろな制約にがんじがらめで、心から学問を楽しめる瞬間は少なかったように思います。

それにひきかえ、今は純粋に「勉強したいから」という気持ちだけで学んでいるのですから、フランス語がすらすらと頭に入ってくるのも当然といえば当然かも知れません。

それにしても、少しでも気になることはやってみるべきですね。「自分にはできないかも」と躊躇するぐらいなら、とにかくダメモトでやってみたほうがいい。「やってみたい」と思うこと自体が、すでに「できる」への第一歩なのですから。

「自分はこういう人間だ」とか、「僕は理系だから芸術はわからない」とか、「私は文系だから数学はダメ」と頭から決めつけたり、「もう若くないから無理」と諦めてしまうなんて、人生がもったいない。それよりも、自分でも気づいていない自分を発見しつづけることによってこそ、人生は豊かなものになるのではないか。

嫌いだったはずのフランス語を楽しみながら、そんなことを想う今日この頃なのでした。

≪ [第12回 母と子をつなぐ道](#) [第14回 女子力不足](#) ≫

山田 真美（やまだ・まみ） プロフィール紹介

作家、日印芸術研究所言語センター長。密教学修士（高野山大学）。現在、お茶の水女子大学大学院博士課程後期在学中。1960年長野市生まれ。明治学院大学卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学（豪）でマッコウクジラの回遊を研究。その後インド政府の招聘でヒンドゥー神話を調査研究。1996年より6年間ニューデリー在住。

主な著書にダライ・ラマ法王へのインタビューも収録した『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』など。

訳書に第二次世界大戦の秘史を扱った『生きて虜囚の辱めを受けず』。

長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績を認められ2007年、インド国立文学アカデミーより世界で3人目となるドクター・アーナンダ・クマラスワミ・フェローシップを受ける。

財団法人日印協会理事。日本文化デザインフォーラム、日本蜘蛛学会、宇宙作家クラブ会員。国立天文台広報普及委員会委員。

山田真美 公式ホームページ: <http://www.yamadamami.com/>



英語を「九九」のようにマスター

1日20分・3ヶ月で、TOEIC 820点より英語力が上になる。英語のしくみは単純だ simpleenglish81.comへ進む



▲このページの先頭へ



[永代供養墓 密厳霊塔](#)
[しいなまちみとら](#)
[こんごういんキッズ](#)
[メディアで紹介](#)

[ぶつぶつ雑記ブログ](#)
[唱えてみよう!](#)
[たいけんしてみよう!](#)

[真言宗について](#)
[仏教いちねんせい](#)
[まんが 小坊主くん!](#)

[金剛院イベント情報](#)
[金剛院News](#)
[金剛院について](#)

[メールを送る](#)
[おすすめリンク集](#)
[バックナンバー](#)
[サイトマップ](#)

好きなことをして飯を食う手順

18186人が読んでいる無料メルマガ。あなたの強みを活かしたビジネスの作り方 personal-promote.comへ進む

